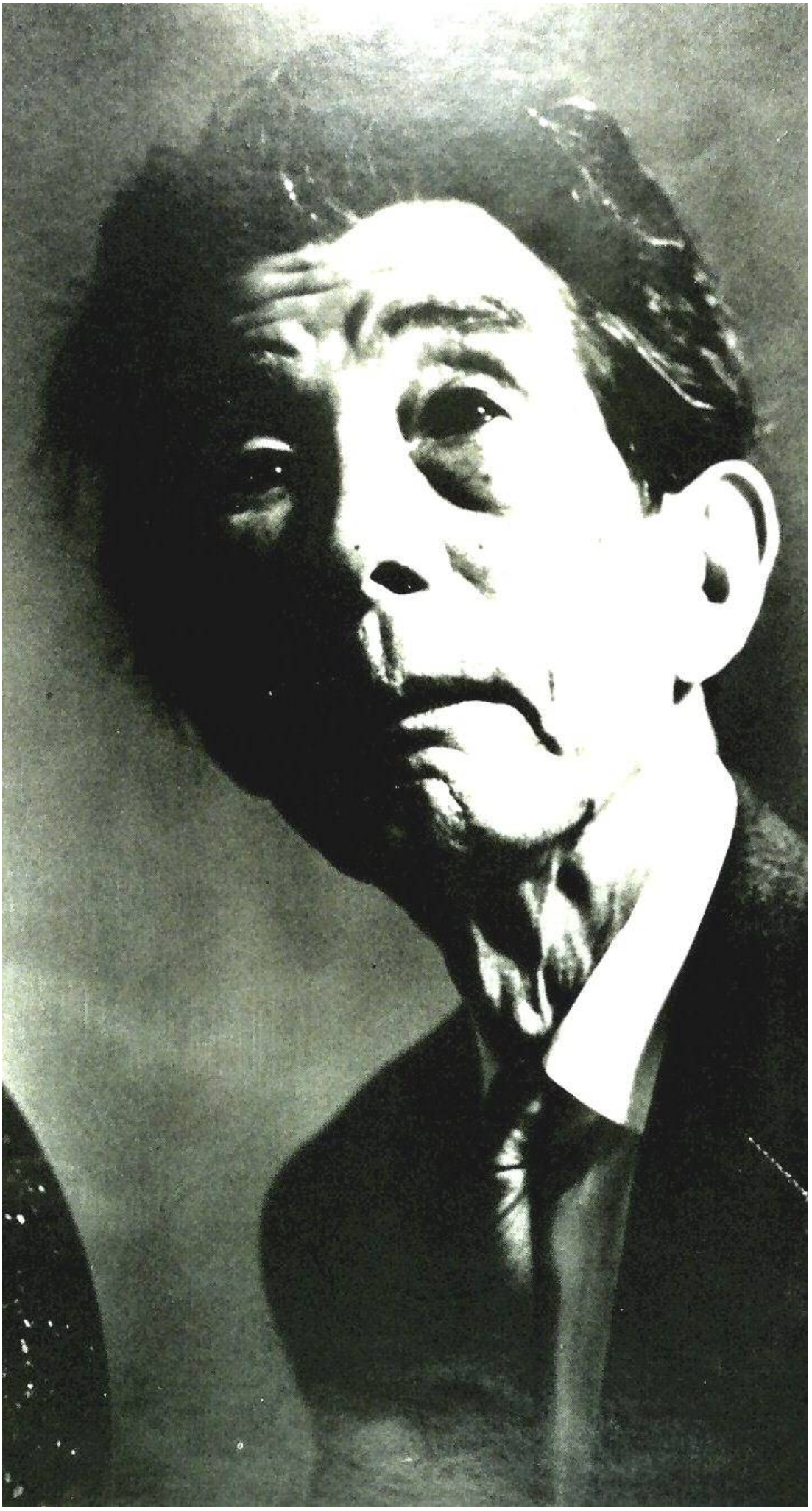
井上康文

ある民衆詩人の足跡



開催にあたって

小田原出身の詩人・井上康文（本名・康治。明治30年（1897）～昭和48年（1973））は、大正時代に同じく小田原出身の詩人・福田正夫らと雑誌『民衆』を創刊しました。また自ら結社を立ち上げ、後進の育成にも携わりました。更に、ラジオでの詩や随筆の放送・朗読に力を注ぐとともに、戦後は、自らが関わった民衆詩派の顕彰にも努めました。

井上の生涯や業績を辿り、その作品に触れることは、詩人にとって詩とは何か、また詩人はメディアとどのように関わってきたか、あるいは戦争の時代を詩人はいかに生きたか、という問いを考えるための手がかりになるのではないでしょうか。

本展では、平成25年（2013）に没後40年を迎えた井上の生涯や作品を、直筆原稿や書簡・写真等から紹介します。本展開催が、井上の足跡を振り返り、小田原出身の文学者への興味をより一層深める機会となれば幸いです。

最後になりましたが、本展開催にあたり、井上博雅氏・井上康男氏をはじめ、貴重な作品・資料の提供、調査等に御協力頂きました皆様にあつく御礼申し上げます。

平成２６年３月　主催者

謝辞

本展開催及び本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。
御芳名を記し、心より御礼申し上げます（敬称略）。

井上 博雅
井上 康男

磯﨑 咲美
恩地 元子

NHK放送博物館
ギャルリー東京ユマニテ

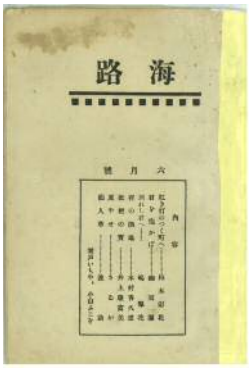
第１章　民衆詩人　井上康文

明治30年（1897）、小田原町幸一丁目（現・小田原市本町）の染物屋に生まれた井上は、小田原町立第一尋常高等小学校（現・小田原市立三の丸小学校）・東京薬学校（現・東京薬科大学）を卒業し、東京市役所の技手、雑誌『新小説』の記者などに就いた。

十代の頃から花岡謙二らと同人誌の製作に携わっていた井上は、小田原出身の詩人・福田正夫と知り合い、福田を通じてアメリカの民衆詩人・ホイットマンらの作風を取り入れていった。彼らは大正7年（1918）に創刊した雑誌『民衆』で注目され、井上は、大正時代最大の詩人団体「詩話会」に入会するなど、詩壇での地位を確立した。

私生活では、大正9年に長崎貞子と結婚し、同年には長女・愛子をもうけるとともに、大正14年には溝尾英子と二度目の結婚をした。

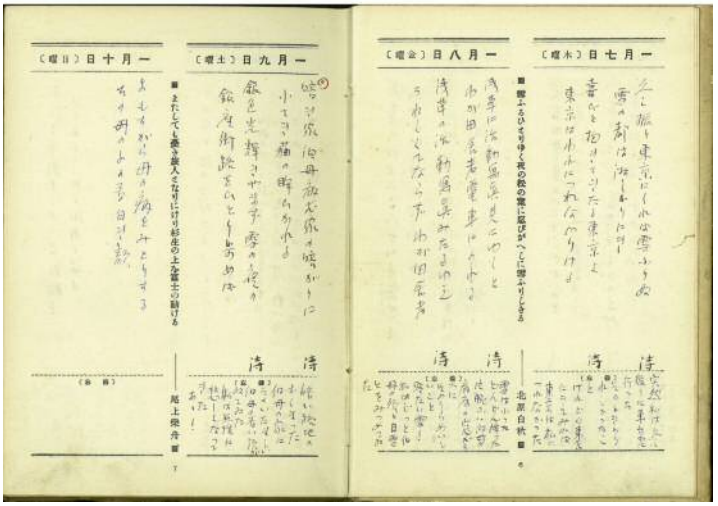
１－１　同人誌『海路』・『向日葵』・『若人』
大正3年(1914)　小田原市立図書館蔵



井上が関わった同人誌。『海路』は「新しい文藝を眞面目に研究する目的」で、『向日葵』は「新しい詩歌の研究」のため、『若人』は海路社を解散して「眞摯に藝術の研究に努力」することと「地方文壇の開拓」を目的に発行された。

井上は活発な文学活動を行っており、これらの同人誌に毎号作品を投稿していた。

１－２　日記
大正4年(1915)　小田原市立図書館蔵



東京薬学校在学中の日記。一日ごとに短歌を書く欄と備忘録が印刷されている。最初は短歌と所感が書かれているが、次第に短歌の欄に日記が書かれるようになる。井上はこの頃から映画に興味を持っており、浅草に活動写真（映画）を観に行ったことが記されている。

また井上は小田原を思い、「東京にきてみれば東京は私につれなかった」「あゝ温かい小田原よ」と書いている。

コラム　『民衆』

福田正夫・井上・白鳥省吾・川崎長太郎・富田砕花など小田原在住・出身者が中心となり、大正7年(1918)～大正10年の間に発行された雑誌。トローベル作品中の“The People”を「民衆」と訳し誌名にしたという。

明治期の詩は、文語体を使い、リズムを重視した作品が主流だった。しかし、明治末期にホイットマンなど外国の詩が紹介されるとともに、口語を使った詩が発表されるようになった。また石川啄木らがリズムにとらわれない自由詩を発表し始め、さらに大正デモクラシーの中で、福田らのように口語自由詩の形式で個人の尊重や人間の解放といった理念を掲げる運動が盛んになった。『民衆』創刊号には「われらは郷土から生まれる。われらは大地から生まれる。われらは民衆の一人である。(略)われらは自由に創造し。自由に評論し。真に戦ふものだ。」と掲げられており、彼らの考え方や抱負がうかがえる。

普通の人々の暮らしを詩の題材にした彼らは民衆詩派として注目されたが、北原白秋らから民衆詩派の作品は詩ではないという批判も受けた。

『民衆』は毎回300部程度が発行され、詩や評論、同人の消息等が掲載された。また北村透谷やトローベルなどが特集として取り上げられた。第2号では井上が特集されている。当初は福田が編集を担当したが、後に井上が実務を担ったという。16号で廃刊したとされていたが、実際には17号が発行されたことが判明している。

私は福田正夫にホイットマン、トラウベルを教えられ、極めて自然に、素直に、民主主義の思想をうけいれ、民衆の生活に密着した現実と幻想の世界を詩にとり入れた。働く人間の生命力に対する愛情、虐げられつづけて苦しむプロレタリヤに対する愛情が、私の詩として表現された。私は偽瞞と、搾取と権力に抵抗し、その情熱を卒直に、極めて単的に平明に詩として書いた。私はそれが民主主義の詩だと信じて疑わず、人間を愛する人道主義的な精神を育てていった。（略）そしてそういう純粋な精神を育ててくれたのは「民衆」であった。私は「民衆」の同人となる前に既に民主的な人生詩を書いていた（略）。しかしその思想を昂めたのは「民衆」であり、「民衆」は民主主義の詩人として生長させた生命の泉であった。そして一方に福田は「邪宗門」と「廃園」を読んで、象徴詩をも深く理解することを私にすすめた。（原文ママ）

井上康文「『民衆創刊前後』」（『近代詩基本文献叢刊第三期『民衆』復刻版』教育出版センター、昭和58年）

暮の三十一日の夕方雑誌をもってきた印刷所の人が、印刷代を払わなければ、雑誌をおいてゆかないというので、私は花岡君のところに金を借りに行ったが、年末ではあり、とてもできないと断わられ、仕方なく、折角出してきた私と妻の新年の晴れ着を、また質屋に持っていって金を作り、やっと雑誌を受けとった。夜も八時頃だったろう。そして元日になり、私は何冊かの雑誌をもって小田原に行った。天神山の小栗の家にゆけばみんな居ると思って小栗の家にゆくと、同人殆んどが集まって、酒を飲んでいる最中だった。私の顔を見ると「井上が来た」と、みんなが歓声をあげ私に飛びついてきた。私はむっとして涙ぐんでしまった。まだ数時間前まで池袋の家の暗い玄関で、髪をのばしてうす汚れた印刷所の人が渋い顔をしてねばって動かなかった。私は折角出してきた晴れ着を質屋に又持っていって、この新年号を持ってきたのだ。そんな苦労も知らないで単純に喜んでいる同人に腹が立った。お坊っちゃん育ちの、苦労知らずの、底抜けのお人好しが腹立しかった。「井上大変だったろう」と誰一人言わない。金はどうしたのか、みんな知っている筈である。そんなことも考えず新年号を見て喜んでいる。私はひどく疲れてもいたのだ。

この新年号が最後となったのは、印刷費もかなりかかったし、私は同人たちにひどく失望もした。私も（略）二十四歳の正月を迎えたので、その若さが、いろいろ考えさせたのであろう。同人たちも誰一人、続けようとも言ってこなかった。

井上康文「『民衆創刊前後』」（『福田正夫　追想と資料』小田原市立図書館、昭和47年 ）

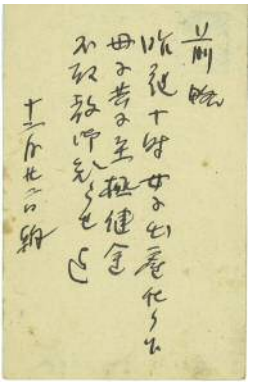
1－3 『愛する者へ』（新橋堂書店）
大正9年（1920） 小田原市立図書館蔵

井上の第一詩集。同名の序詩と「愛の天使」「心の底の叫びを」「人生の旅人」の三篇から成る。長女の名前はこの詩集から付けたという。

1－3

1－4 井上康文葉書（福田正夫宛）
大正9年（1920）12月22日　小田原市立図書館蔵

長女・愛子の出生を報告している。



1－4

1－5 『華麗な十字街』（草原社）
大正15年（1926） 小田原市立図書館蔵

井上初めての散文詩集。それまでの時点で井上が書いた全ての散文詩（普通の文章の形式で書かれた詩）を集めたという。「華麗な十字街」「生活の台風」「愛は虐げる」「評論」の四部に分かれている。

井上は散文詩についての自身の信条を、「詩のリズムを有すること」としている。北原白秋も民衆詩派を批判した際、「詩もまたその第一音から魅了する」と記しており、双方ともに音感を重要視していたことが分かる。

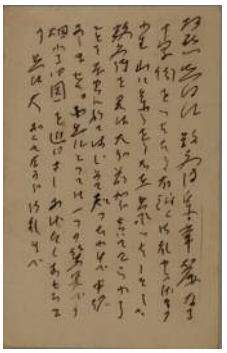
なお、本資料には「頒布記録」が挟み込まれており、芥川龍之介や川端康成・菊池寛・島崎藤村・高村光太郎・室生犀星などに頒布したことが分かる。

1－6 井上康文葉書（南江二郎宛）
大正15年（1926）6月1日　小田原市立図書館蔵

『華麗な十字街』の装幀を担当した南江二郎への完成報告。「自分のものをこうして苦しんでこしらへた喜び」「いろんな苦労をしてやっぱり不成功でした」という一節からは、詩集を作った喜びとともに物足りなさを感じる井上の心境が読み取れる。なお、宛先の南江は坪内逍遥・小山内薫らに師事した詩人で、『詩集』等にも参加し、戦中から戦後にかけて社団法人日本放送協会（現・NHK）に在籍した。

1－7　西條八十書簡（井上康文宛）
大正15年（1926）6月26日　小田原市立図書館蔵

『華麗な十字街』送付への礼が書かれたもの。生活が窮乏してもなおナイーブな仕事をしていると、井上への敬愛の念が示されている。



1－8　前田夕暮葉書（井上康文宛）
大正15年（1926）7月1日　個人蔵

『華麗な十字街』送付への礼が書かれたもの。井上への賛辞が見られる。なお、前田夕暮は神奈川県秦野市出身の歌人で北原白秋とも交流があった。井上はこの詩集を多くの文学者に頒布するとともに出版記念パーティーを開いたため、佐藤春夫（詩人）・河井醉茗（詩人）・今東光（小説家）といった文学者から届いた葉書類が残されている。

第２章　詩人育成の人　井上康文

大正10年（1921）、井上は「詩話会」から分かれる形で「詩人会」を設立するとともに、機関誌『新詩人』を発行した。「詩話会」が少数の委員によって運営され、新人の活躍の場が限られていることが動機だったという。また、昭和2年（1927）には、「詩集社」を興して機関誌『詩集』を創刊し、新人が活動する場所作りに貢献した。この頃の井上の書簡からは、同人への熱心な指導の様子がうかがえる。

井上は、こうした活動に加えて、大正14年に放送が始まったラジオへ積極的に進出し、詩や映画を題材に講演等を行った。放送開始当初は50万程度だった受信契約数は、約十年で300万程度まで増加しており、ラジオは茶の間の主役ともいえる存在だった。井上はこうしたメディアに積極的に出演することで、詩の普及をめざしたのかも知れない。また、放送開始当初から、民衆詩派の作品は朗読という形でラジオ放送されており、戦時中には井上も執筆した「愛国詩」の朗読へと繋がっていった。

なお井上は、昭和4年には岡田淑子（きよこ）と三度目の結婚を行い、昭和11年には長男・博雅を、昭和19年には次男・康男をもうけている。

2－1　『日本詩集』第一回出版記念写真
大正8年（1919）4月6日　個人蔵

「詩話会」のアンソロジー『日本詩集』の出版記念会の際に撮影されたもの。上段左から五人目が井上で、中段左から六人目から富田砕花・高村光太郎・白鳥省吾と続く。下段は左から福田正夫・百田宗治、二人おいて室生犀星。

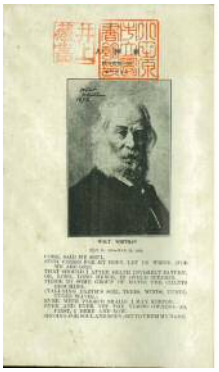
コラム　「詩話会」

大正時代最大の詩人団体。大正6年（1917）に詩人・川路柳紅などが中心となって結成された。三木露風や萩原朔太郎らの詩人同士の論争を背景に、「詩人相互間における主義主張上の誤解を除き、且つ詩壇そのものの社会的地位を向上する」ことが目的だった。北原白秋・白鳥省吾・福田正夫・富田砕花・室生犀星・萩原朔太郎・西條八十らが参加し、後に井上も会員となった。例会の開催や、アンソロジー『日本詩集』（年一回）、機関誌『日本詩人』等の発行が主な活動だった。

当初は詩人同士の親睦団体としての性格が強かったが、大正10年には詩の芸術性を重んじる北原白秋・西條八十・堀口大學らが脱退し、「新詩会」を結成した。また、少数の委員による運営や会員の入会を限定的にしたことから、井上が「会員二十氏以外の新人」を集めて「自由な、平等な会」として「詩人会」を結成するとともに、機関誌『新詩人』を創刊するといった動きもあった。

日本における初めての年刊詩集の発行等、詩の普及に一定の役割を果たしたが、若手詩人からの批判や、会員の作風の変化等もあり、大正15年に解散した。

2－2 『新詩人』
大正10年(1921)5月～大正13年(1924)10月　小田原市立図書館蔵



井上が中心になって結成された「詩人会」の会誌で、大正10年5月～大正13年10月まで発行された。同人の作品や詩の翻訳、評論等が掲載されている。「新詩壇」と題して若手の作品も多く掲載されており、「若い詩人が相集まって、大いに仕事をしよう」という会の性質が現れている。

当初は若手詩人の発表の場として勢いを持っていたが、「詩話会」からの切り崩し工作のために同人の脱退等もあった。

創刊号には井上の「詩人会に就いて」という文章が掲載されており、井上自身が首謀者ではなく、また「詩話会」への対抗組織ではない旨が説明されている。

2－3 『詩の作り方』(素人社)
昭和2年(1927)　小田原市立図書館蔵

「文藝入門叢書」の一冊で、「詩の作法」「詩の種類と其内容」「詩の分野と其内容」「日本詩壇の推移」の四部構成。詩の位置づけや日本における詩の変遷などが記されている。井上は「詩は広義に於ける凡ゆる芸術の最高位にあるべきものである」と書いている。

また、自らも関わった民衆詩運動について「人間それ自身の生活の中に歓喜を見出し、自由な平等な新精神を歌って、古き文芸に対する解放運動を起した」としている。

2－4 『詩集』
昭和2年(1927)11月～昭和10年(1924)5月　　小田原市立図書館蔵

『新詩人』廃刊の後、井上が結成した「詩集社」の詩誌で、昭和2年11月～昭和10年5月まで発行された。『新詩人』とはやや傾向が異なり、誌面の多くが同人の詩や短歌などで占められている。また、同人の作風や人柄について、同人以外の関係者も交えて互いに紹介し合うコーナーもあり、昭和3年6月号には井上が取り上げられている。福田正夫は井上について「仕事好きな性質が非常に損な道を歩かせて来た（略）詩と文学以外の仕事に手を伸ばさないで、物質的な損まで、今後しないやうに願ひたい」と記しており、井上の人柄がうかがえる。

2－5 井上康文書簡(南江二郎宛)　昭和2年(1927)11月30日　小田原市立図書館蔵

南江への返信。詩誌『詩集』の充実を喜ぶとともに、南江が『詩集』に載せた作品を批評している。良くない所を明確に指摘しつつ、向かうべき方向もアドバイスしている。

2－6 「詩人会」例会写真
大正10年(1921)6月
小田原市立図書館蔵

前列左から二人目が尾崎喜八、右隣が花岡謙二。井上は後列右から三人目。

2－7 「映画雑談」原稿　昭和3年(1928) NHK放送博物館蔵

「JOBK　七月三日六時半」という書き込みがあることから、NHKのラジオ放送のための原稿と思われる。井上は、現代は映画時代だと捉える。その上で、映画人が言及したことがない作品について、詩人としてではなく映画を愛する者として、映画の見方を座談会的に話したいと記している。

この時期は、日本映画にトーキーが導入される直前で、無声映画が盛んだった。当時の社会における映画の存在感がうかがえよう。

現代は映画時代であります。

フラッシュバック式のめまぐるしい転換、ジャヅの踊り、現代はまさに映画時代であります。みんな映画に、映画的に陶酔しやうとし、生活の上に唯一の慰めを求めてゐます。然し、その映画にはどんなものがあるか、どの映画に何を見るか。

スクリンが明るくなると共に消えてゆく儚い夢か――

映画ファンの憧憬するドロレス・デルリオ、私の憧憬するカニングスの顔、リア・デ・プティの光った爪、ノーマ・シェラーの鼻、妻三郎の眼――

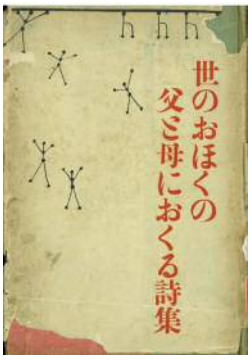
外国映画、日本映画、剣戟、父性愛、母性愛、恋愛悲劇、それらの中に見いだす現代の世相、私は未だかつて映画人の言はなかった映画に対する感想を、夏の夕のベランダに愉しくも青い夜を涼みながらの揺り椅子によって流すやうに語りたいと思ひました。そこに映画論を求めてはいけません。

私は詩人としてでなく、映画を愛し、映画に愉しみをもってゐるものが、映画をどんなふうに見るかと云ふことを極めて座談的に話したいと思ってゐます。

暑さを忘れる夕ぐれどき、ベランダでみんな涼みながら、愛すべきプティやシェラーやリリアンや、ボウを思ひ出して下さい。

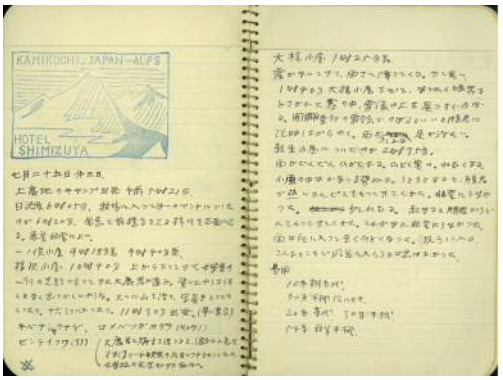
（完）　（井上康文「映画雑談」、NHKラジオで昭和3年7月3日放送）

2－8　『愛子詩集』（紅玉堂書店、画像は表紙カバー）
昭和5年（1930）　小田原市立図書館蔵



愛しい子どもを歌った作品を集めたもので、「人生の挿話」「聖母マリヤを焼く」「若き母とその子」の三部から成る。冒頭には、「愛子よ／健やかに伸びよ／幸福の中に生きよ。」と記されている。また井上は、自身の心情について「私の詩篇はあまりに暗い生活をうたっている。その詩の歌われたときには、私はその現実の肉迫にうたれてしまった。詩を書かなければ救はれ難かったのである」とも記している。なお、井上によれば書名の「愛子」は「あいし」と読むが、長女の名前と同じ題名だったことから、友人には「あいこ」と読まれたという。

2－9　井上康文手帳　昭和8年（1933）　小田原市立図書館蔵



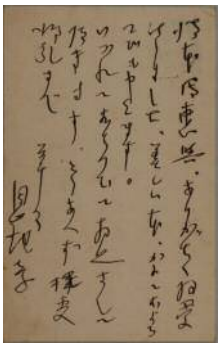
井上の登山記録と思われる。松本から上高地に入り、日本アルプスの山々を登ったようだ。登山の行程や会った人、目に入った植物や弁当・絵ハガキ代等の費用が詳細に書かれるとともに、山小屋などで押されたスタンプがみられる。常に手帳へのメモを欠かさなかった（井上博雅氏談）という井上の几帳面さが表れている。この時期、井上は山への関心を深めていた。

2－10　井上康文書簡（南江二郎宛）
昭和10年（1935）3月24日　小田原市立図書館蔵

南江への書簡。大阪中央放送局（現・NHK大阪放送局）で放送されるラジオ番組での講演内容について、「山岳文学論」「日本詩壇の現状」「詩の実用と朗読讃美」が候補に挙がっている。当時、井上は詩以外の分野にも取り組んでいたようだ。

末尾には、福田正夫の窮状について相談したい旨が記されている。当時福田の妻・いし子が病床にあったため、井上は島崎藤村や北原白秋・室生犀星・山口蓬春らに揮毫を依頼し、それらの頒布会を開いて福田を慰労したという。

2－11　恩地孝四郎葉書（井上康文宛）
昭和16年（1941）6月19日　個人蔵



書籍が到着したことへの礼が書かれている。

２－１２ 「愛国詩　祖国を護る」台本
昭和17年(1942)2月4日　NHK放送博物館蔵

NHKのラジオ台本。井上や詩人・草野心平らが執筆し、朝7：50～8：00に放送された。井上は「祖国を護る」と題して、空も陸も万全の備えがあり、各地で「忠勇の兵隊」が戦っているとともに、街にも村にも「愛国の民」がいるのだから祖国は安泰だと歌っている。

昭和16年の真珠湾攻撃による開戦以降、それまで単発的に放送されていた「愛国詩」はレギュラー番組となり、詩の朗読が頻繁に行われた。放送された作品は朗読用に活字化され、各地で戦争詩の朗読会も行われた。当時の詩人はこのように戦意高揚に一定の役割を果たした。

コラム　南方徴用作家

日中戦争の激化に伴い、国力を最大限戦争に振り向ける総力戦体制の構築を目的に、昭和13年(1938)に国家総動員法が制定された。これに基づき、翌年には国民徴用令が施行されるとともに、昭和16年には文学者も動員の対象となった。

当時の資料には、「マレー、ビルマ、スマトラ、ジャワ、比島などの各地域における文化工作、特に緊急を要望される報道宣伝部門を更に強化、推進するため、今度南方に骨を埋むるの気概を以て挺身報道宣伝事業に勤務する要員を募集する」と書かれており、ドイツのPK部隊(Propaganda Kompanien、宣伝中隊)を参考にしたとされる。陸軍・海軍あわせて宣伝班(報道班)として70名程度が徴用され、井伏鱒二・海音寺潮五郎・高見順・火野葦平らが派遣された。主な業務は、占領地における日本語の普及・教育や日本軍の戦意高揚等だったようだ。

文学者の場合は、派遣先での宣伝業務だけではなく、帰国後に現地での見聞を基に講演や執筆活動を行った。井上も海軍報道班員として、昭和17年にラバウルに派遣され、トラック諸島等を回った。帰国後には『赤道を越えて』『水兵の眼』の二冊の随筆集を執筆するとともに、講演等も行った。

２－１３ ラバウルでの井上康文
昭和17年(1942)
小田原市立図書館蔵

左側の写真の中央正面が井上。

右の写真の看板には「羅春海軍報道部員会」と書かれている。なお、「羅春」はラバウルのこと。

２－１４ 『詩・散文　第一』
昭和17年(1942)　小田原市立図書館蔵

井上の日記。3月19日の横浜出発から、ラバウル到着後の4月25日までのことが書かれている。起床時間から周りの景色、会話の内容、空襲の詳細、現地住民の様子等が、図を交えて詳細に記録されている。井上自身の所感はあまりみえないものの、当時の井上の行動が分かる資料である。

２－１５ 『水兵の眼』(文園社)
昭和19年(1944)　小田原市立図書館蔵

徴用後に出版された二冊目の随筆集。軍関係者の推薦文と、南方戦線での兵士の様子や軍隊生活を記した部分、帰還後に現地報告の講演を行った軍需工場等の様子を記した部分等から成る。情報統制により、一部の場所や人名は伏せられている。

本書では、水兵や軍需工場の工員の職務への熱意や努力を紹介することで、読者により一層の戦争遂行への努力を求めている。当時、徴用作家に求められた役割が分かる。

2－16　『征くぞ空の決戦場』（日本音楽図書株式会社）
昭和19年（1944）　個人蔵

「国民合唱」の一つとして井上が作詞したもの。昭和18年9月の航空記念日に合わせて作られ、曲は「空の神兵」等で知られる高木東六が手掛けた。

「国民合唱」は、昭和16年～昭和20年にかけて放送された音楽番組で、大阪中央放送局（現・NHK大阪放送局）の企画で昭和11年から放送された「国民歌謡」が前身である。「剛健でそれで家庭の歌として相応しい（略）国民全部が歌える歌」が望まれたとされ、戦時中における国民動員の一端を担った。戦後は「ラジオ歌謡」に改称された。

第３章　戦後の井上康文

井上は、新聞記者をしながら戦後も詩や随筆等を執筆した。詩作以外の分野でも、産経新聞に競馬の記事を執筆するとともに、競馬関係の作品を上梓する等の活動も行った。

また、昭和25年（1950）には、「井上康文詩の朗読会」を設立するとともに、小田原市立桜井小学校の校歌を作詞する等、小田原での活動にも力を注いだ。更に、昭和34年に水の公園（現・小田原城址公園）内に作られた民衆碑の建碑計画にも携わる等、自身も関わった民衆詩派の顕彰にも努めた。

没後の昭和55年には、城山公園内に井上の文学碑が建設され、その足跡を今に伝えている。

3－1　「高原の秋の抒情詩」台本
昭和20年（1945）11月1日　NHK放送博物館蔵

ラジオ放送された井上の作品。山で生活する兄妹の様子が描かれている。高木東六が作曲・指揮を担当し、松竹交響楽団が伴奏をした旨が記されている。終戦直後の物資不足のためか、別の用途で使われた紙が再利用されている。

昭和20年9月にラジオ・コードが公布され、ラジオ放送の検閲がGHQの下部組織であるCCD（民間検閲局）により開始された。放送台本は英語訳とともに事前提出が義務付けられ、検閲結果に応じてスタンプが押されて返却された。放送の際は原稿と一字一句同じでなければならなかったという。本資料には検閲結果が記されたスタンプは押されておらず、提出した台本ではないのだろう。

3－2　『梅』（富岳本社）
昭和22年（1947）　小田原市立図書館蔵

井上の第十詩集で、600部限定で発行された。装丁は恩地孝四郎。昭和20年9月から翌年9月までの作品から井上自身が選んだ。NHKのラジオで朗読されたり、曲が付けられて放送されたものが多いという。

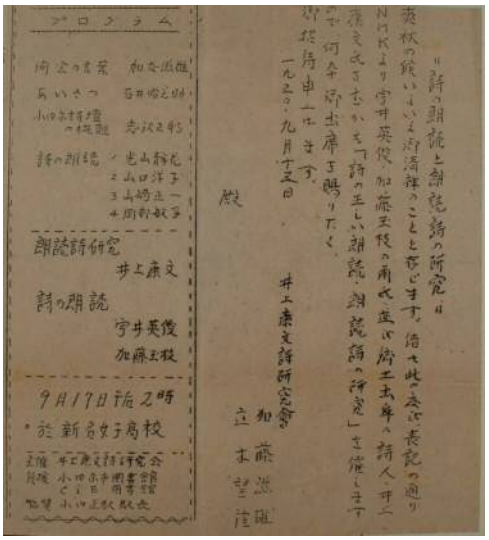
この詩集に収録された「一九四六年の日本」という作品には「隣人は欺し合い、／傷つけ合い、／生活は極度に乱調子になり、／利己主義者が瀰漫する、／ああ、太陽だけが明るく輝き、／微風が窓から爽やかに顔を吹く」と記されている。

コラム　恩地孝四郎と『梅』

恩地孝四郎（明治24年（1891）～昭和30年（1955））は大正～昭和期に活躍した版画家。創作版画の分野で抽象的な作風で活躍するとともに、装幀家としても活躍した。小田原にも住んでいたことから北原白秋とも知り合い、『まざあ・ぐうす』等白秋作品の装幀も多く手掛けた。恩地は、井上が立ち上げた「詩人会」にも同人として加入しており、大正時代から井上とは知己だった。井上の詩集の装幀も恩地の手によるものが多い。

井上の詩集『梅』の装幀に使われたと思われる文様が彫られた版木が残されている（個人蔵）。約10×20cmの薄い木の板に、他の装幀に使われたと思われる文様とともに、『梅』の表紙と扉絵の文様が彫られている。

3－3



プログラム

詩の朗読

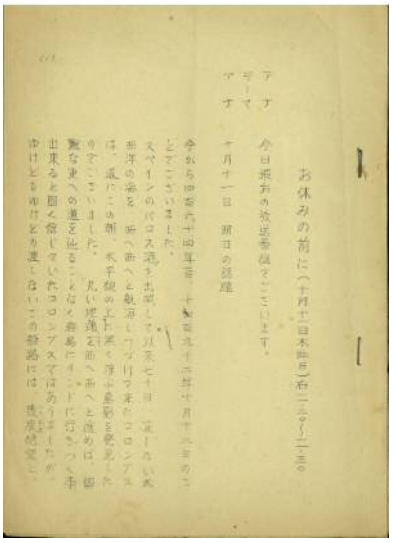
朗読詩研究
井上康文

詩の朗読
宇井英俊
加藤玉枝

9月17日 午後2時
於 新宮女子高校

井上康文詩研究会
加藤淑雄
立本望洋

3－4



お休みの前に

3－5

3－3　恩地孝四郎「作者心象像」
昭和22年(1947)　個人蔵

『梅』の扉に収録された作品。作品右上には、「à monseur Inoûê」「30.Mars -47」 と記されている。「monseur」は「monsieur」（ムッシュ。フランス語で男性への敬称を示す）と思われる。また、作品右下には「K.Onzi」という署名がある。

3－4　「詩の朗読と朗読詩の研究」案内チラシ
昭和25年(1950)　個人蔵

井上の手帳に貼り付けられた研究会のお知らせ。この会は、昭和25年に井上が立ち上げた「井上康文詩の朗読研究会」だと思われる。NHKのプロデューサー・宇井英俊らを招いて詩の朗読等が行われたようだ。あいさつをした石井富之助は元小田原市立図書館長で、「小田原詩壇の概観」を述べた志沢正躬は、元小田原市立図書館職員で詩人。

3－5　「お休みの前に」台本
昭和31年(1956)10月11日　　小田原市立図書館蔵

NHKラジオで朗読された井上の作品。金蘭簿とは、友人の名前や住所を書く手帳のこと。孤独な感情と井上の人生観が表れている。

「お休みの前に」はNHKラジオで午後11時台に放送された、一日の最後の番組。二部構成で、最初に、次の日の解説（その日に起こった歴史上の出来事の紹介）である「明日の話題」があり、その後でエッセイなどが朗読された。井上はこの番組に抒情詩やエッセイを多く執筆した。

私はその金蘭簿という小説の題をふと思い出すことがあるので、大辞典で調べてみると、金蘭簿というのは友人の住所姓名を記す手帳であるという解釈がついていたので、私もそれを真似て友人の住所を、金蘭簿と書いたノートに書きつけた。そうして私の金蘭簿に書いた友人や知己は何百人、何千人かあった。一緒に山に登ったり、一緒に飛行機に乗ったり、海で泳いだり、それはみんな兄妹のように親しく、交りは深かったし、或はいろいろの会合で逢ったり、同じ旅の宿の一室で語りあかしたり、酒杯を酌みかわしたり、それぞれ私の人生につながりをもった人達であった。しかしそれらの人々は、もうみんないつの間にか消息もとだえ、いまはどうしているか知るよしもなくなってしまった。私は私なりにその日暮しに追われてあくせくしているが、それらの人達も結婚し、父となり、会社の社長や重役や、政治家や、文学の大家にもなっていて、それぞれの自分の暮しを営んでいるのであり、あんなに繁く毎日のように逢わずにいられなかった幾人かの人達もみんな、どこにどうしているか、まるで消息がわからなくなってしまった。
或はもう永久に逢えない人になってしまった。
あんなに親しかったのに…。私はその親しかった人々の後姿を人生の曲り角を吹く秋風と共に追いかけている。秋風は町角をすーっと通りぬけてかえらない。別れた人も、もう永久に帰ってこない。
愛情とは、そういうものであろうか。

（井上康文「金蘭簿」、NHKラジオ第一で昭和31年10月11日放送、後『随筆集　人生の対局』に収録）

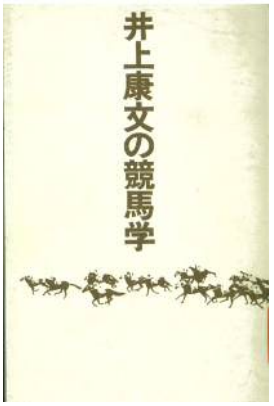
３－６　井上康文書簡（加藤茂雄宛）
昭和33年(1958)3月4日　小田原市立図書館蔵

民衆碑設立についての指示事項や碑のデザイン案、発起人集め、『民衆』の紹介が記されている。井上の民衆碑に対する強い思いが読み取れる。

３－７　民衆碑除幕式
昭和34年(1959)1月26日　小田原市立図書館蔵

左から二人目が、元小田原市社会教育課長・中野敬次郎、一人おいて元小田原市立図書館長・石井富之助、右から二人が井上。

３－８　『井上康文の競馬学』（サンケイ新聞社出版局）
昭和45年(1970)　小田原市立図書館蔵



勝つ馬の選び方を血統や競馬場のコース等から分析した部分と、競馬に関する随筆部分から成る。井上は競馬について、「レースには、偶然性は極く少なく、やはり勝つべき馬が勝つ」と記している。

井上は昭和10年（1925）～昭和20年に報知新聞社運動部、昭和25年からは時事新報社（後にサンケイ新聞社運動部）に在籍し、競馬の記事を書いた。次男の康男によれば、水曜の午後に出かけて木曜と金曜に調教を見学し、土日の競馬開催に立ち会い、出かけている間は厩舎に宿泊するのが井上のスケジュールだったという。

３－９　『愛子詩集』（集団形星）
昭和46年(1971)　小田原市立図書館蔵

昭和5年（1930）に出した『愛子詩集』から、長女・愛子を題材にした作品を選び、他の詩集の作品と合わせたもの。井上は、昭和31年に長女・愛子を事故で亡くしており、愛子の遺児・泠美の成長を見たことが出版のきっかけだったという。あとがきには「私の愛子を憶う心は、歳を重ねるに従って深くなってゆく」と記されている。

３－１０　井上と家族
年不明　個人蔵

左から、妻・淑子、孫・泠美、長男・博雅、次男・康男。愛子が亡き後、井上は泠美を引き取って育てた。

３－１１　井上淑子葉書（中嶋美鈴宛）
昭和47年(1972)10月22日　小田原市立図書館蔵

井上が亡くなる一年前に書かれた葉書。心細くてなかなか放してくれないといった記述から、井上の晩年の様子がうかがえる。なお、宛先の中嶋美鈴は、福田正夫の四女である。

３－７

３－１０